人権・同和問題啓発資料　No.43

しあわせに生きる

令和6年度総合隣保館文化祭

ダンス、太鼓演奏、詩吟、人権劇
記念講演、作品展示

ダンス

太鼓演奏

詩　吟

人権劇

記念講演

作品展示

三木市立総合隣保館

ー　は　じ　め　に　ー

総合隣保館では地域共生社会の実現に向けて、地域住民の活動の拠点としての役割を果たすとともに、同和問題をはじめ、あらゆる人権課題に向き合う啓発活動を進めています。今年度も、「総合隣保館文化祭」「同和教育セミナー」「人権フォーラム」「土曜子ども教室」「フィールドワーク」などお互いの人権を尊重し合える社会の実現に向けて、人と人をつなぐ事業を展開してきました。

特に「総合隣保館文化祭」は5年ぶりに飲食を含む催物を開催するなど、コロナ禍以前の活気をほぼ取り戻しつつあると感じています。また、記念講演会や子どもたちのダンス、太鼓演奏、詩吟、小・中学生と市民劇団による人権劇などの発表を行いました。各団体による作品展示は例年通り5日間行いました。

このたびの人権・同和問題啓発資料「しあわせに生きる№43」は、総合隣保館文化祭記念講演に講師としてご講演いただきました西田昌矢さんの講演録と、人権フォーラムで発表いただきました方の発表記録を掲載することとしました。

西田さんの講演は、ご自身の体験や悩みに基づく非常にリアルなお話であり、「さまざまな生きづらさを感じている人が自分のすぐそばにいるという意識を持ってほしい」というメッセージは、私たちの心に強く刻まれました。

また、今年度の人権フォーラムは令和6年10月に3回にわたり、合計12人の方々に人権に関する経験や思いを発表していただきました。そのうち、藤原美和さんの発表記録を掲載します。

以上の講演録と発表記録を文章として読みやすくするため、一部編集しました。毎月お届けしています「隣保館だより」と併せて、今回の「しあわせに生きる№43」を、人権学習の手引きとしてご活用いただければ幸いです。

目　　次

第１部（第４１回総合隣保館文化祭記念講演）

私は部落から逃げてきた　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１Ｐ

ジャーナリスト／西田 昌矢 さん

第２部（人権フォーラム　－私のひとことー）

つながる・つながっていく ～杉の子学級から～　・・・・・・・・　19Ｐ

志染小学校児童生徒支援教員／藤原 美和 さん

第１部　第41回総合隣保館文化祭記念講演会講演録

演　題　　私は部落から逃げてきた
講　師　　ジャーナリスト / 西田 昌矢 さん

みなさんおはようございます。はやくからお集まりいただきありがとうございます。これから部落問題についてのお話をします。私は九州にある西日本新聞社で記者をしていて、連載記事を書いていました。タイトルは、「私は部落から逃げてきた」。タイトルどおり、わたしはそもそも、部落問題について、取り組んできた人間ではないです。ですが、きっかけがあって、部落問題についての取材を始めて記事にしました。西日本新聞社に平成27年に入社して、朝倉市という所で取材をしてきました。今、少し事情があり一時的に新聞記者を辞めているという状況です。

記者時代は、たくさん記事を書きました。皆様から見て左側の記事が、部落問題について初めて書いたもので、この記事をもって、自分が被差別部落出身であることを明かしました。明かしたうえで、自分のこれまでの生い立ち、部落問題とか、なぜ部落から逃げてきたかということを、同じ被差別部落出身の友だちと家族の取材をしました。連載の内容に沿って話していきたいと思います。

まず、私と部落との出会いというところから話していきたいと思います。私は、中国地方の被差別部落に生まれました。ですが、自分が被差別部落に生まれる前からそのことを知っているわけはなく、当然誰かに教えられて、自分は部落の出身と知るわけです。その出会いは、小学校低学年の時にありました。小学生は一人で帰ると危ないということで、当時は集団下校して家に帰っていたんです。ところが、ある日自分の家に帰るはずなのに、行き先はなぜか学校から、先生の引率で地域の集会所に集められました。そこに小さな部屋があって、先生が目の前に立って言われた言葉は、「部落差別に負けない子どもになりましょう」でした。まず、当時は言葉の意味が分かりませんでした。部落と言われたのかブラックと言われたのか、よく分からないというところがスタートです。隣の友だちと顔を見合わせて、ブラックみたいやなと。そして、地区学習会という名の勉強会が始まりました。週１回木曜日の放課後に、この集会所に集まって、算数や国語の参考書を使って学校の補充学習的な子どもたちの勉強会がありました。その中で、年に１回か２回程度、部落差別について学びました。元々補充学習的な意味合いが強い学習会でした。地区学習会の中で、算数と国語の勉強が中心で、たまに部落問題について学ぶ。部落差別というのがあって、生まれた場所で差別があるんだ

と。具体的にどういうときに起こるかというと、結婚とか就職のときに出てくるんだ、被差別部落出身を理由に結婚を断られたり、就職ができなかったりというようなことがあったんだというような話をされました。なんとなく、小学校の高学年の頃に部落差別のイメージというのは、あったのかなという印象でした。あったのかというのは、昔のことで、今はないと思っていたので、正直他人事でした。それまで、当時の人間関係と言ったら、小学校の学校の中くらいしかなくて、そこで部落の子がいじめられたりするようなことはなかったですし、昔のことではなかったのかと思いました。人の生まれた場所が人の人格に関係あるのかなと、子ども心にリアリティを感じなかったんです。

けれども、部落問題を自分のこととして考える転機が実はありました。地区学習会の中で自分が差別を受けた実体験を語ってくれる人がいたんです。こういうことをされましたということを語ってくれたんです。地域のおじさんです。やさしいおじさんでした。もともと体験を語ってくれる前から、面識がありました。地域の行事によく来てくださって、子どもたちの前ですごくにこにこしている、とってもかわいがってもらって、大好きなおじさん。そのやさしいおじさんが、地区学習会の中で登壇されているんですよね。いつもと雰囲気が違うんです。やさしいおじさんなんですけれども、その時には「ちょっとまじめな話をしたいと思います」と前置きをして、なんか表情が、空気が違うというか、筆箱の中をいじったりして遊んでいる子どももいたんですけれども、その子どもがおじさんに結構きつく怒られたりしていました。おじさんも怒るんだと思いながら、とにかくいつもと雰囲気が全然違うなという印象でした。おじさんは結婚差別の話をしてくれて、僕の記憶もおぼろげですが、結婚相手から、部落の出身であることを理由に「穢れる」みたいなことを言われたと。で、その時に感じた衝撃というか体験が、頭の中にすごく焼き付いていて、穢れるというのは結構強い言葉だと思うんですよね、小学生の私には。こんな言葉を使うとたぶん親とか先生にこっぴどく叱られるだろうなというふうな言葉でした。大人が大人に言うんだ、それが部落差別なんだと思ったときに、やばいなというか、危機感を初めて感じました。自分が被差別部落出身なので、自分もいつか言われるのかな、友だちに言われるんじゃないかと、びっくりしました。

もう一つきっかけがあって、その体験を聞いた数か月後くらいのことです。昔は小学生ぐらいになって初めて自分の地域の外で友だちができるんです。小さい頃は危ないということで、自分の地区だけで遊びなさいとなっていたんですけれども、自転車に乗るようになって、ある程度遠くまで遊びに行ってもいいよとなり、それで地域外の友だちの家に初めて遊びに行って、たぶんテレビゲームか何かやっていたんです。何人か遊びに来て、その家のおばあさんが、お茶とお菓子を出してくれて、「あなたはどこから来たの」とそれぞれ友だちに聞きます。私も聞かれて、「どこどこから来ました」と言ったと

ころ、「あなたは部落の子なのね、部落の子なのに賢いね」と言われました。悪気がある言葉ではないと思います。傷つけようとかそんな意図は全然ないんだと思います。部落の子は賢くないんだと、そういう経験があるんだと、子どもながらに微妙な言葉のニュアンスというか、それに気付いて、偏見はまだあるんだと、昔の話ではなかったと思って、またあらためてやばいなと思うわけです。この間、体験を聞いたばかりで、昔のことじゃないんだとあらためて知ってやばいなと思いました。

ここからどうなったかというと、こういう体験をきっかけに、部落問題に取り組む人たちは、いっぱいいらっしゃいますが、私はそうはなれなくて、タイトルどおり私は部落から逃げるようになりました。逃げるというのは、まずは反発を始めました。主に部落問題学習で反発を始めました。地区学習会や学校で学年のみんなが受ける部落問題の勉強の時に、「俺は部落とは関係ない」と言っていました。部落とは関係ないと思ったし、地区学習会でも反発していました。とにかくその部落問題学習に対して不真面目というか、そういうふうによそおっていました。なぜかというと、多分小さい町であったので、自分が部落出身であるとみんな分かっていた。自分が部落に住んでいたことは地区学習会や学校の授業の話の中で、みんな分かっていました。自分は友だちからしたら、なんかよく分からない勉強会に毎週通っているから、なんとなく分かっていたと思うんです。この人たちは部落の人なんだなあと。ですので、いつ自分が、穢れるみたいなことを言われるか分からない、だったら言われる前に先手を打っておこうというか、強がることで俺は部落に生まれてきたけれど、差別とは関係ないぞ、差別される人間ではないぞ、他の部落の生徒とは違うぞということを暗に言いたかったんじゃないかと思っています。反発をずっとしていました。とにかく部落問題に関わることには無関係でいました。小学校、中学校、高校と地元で過ごしました。

大学生になりました。大学生になると、部落問題のことを考えることがめっきり減るわけです。大学の進学先は東京都の大学でした。ですから周りの学生はみんな関東の人ばかりです。自分の同郷は一人もいなかったですし、関西地方の人すらも、あまり見かけなかったです。東日本というか、日本の東側の人ばかりが多かったので、自分の地元の地名を言ったところで、それが部落なのか、分かりようがないわけです。ですので、すごくお気楽に過ごすことができました。ですが、たまには部落問題について考えないといけないこともあるのです。私が借りたアパートに友だちが遊びに来て、友だちがトイレに行ったんです。その時に本棚を見たら、部落というのが私の目に飛び込んできました。背表紙が『被差別部落のくらし』という本があって、なんとなく自分が大学の図書館で借りていたんです。それは、被差別部落の歴史や文化について書かれた本なんですけれども、地区学習会を受けていた集会所にその本が蔵書としてあって、

多分小さい頃見たんでしょうね。昔こういう本読んだなと思いながら、自分の本棚に入れっぱなしにしていると、友だちにこの本を見られたら自分が部落の人なんじゃないかと疑われるのではないかと思って。古めかしいそんな本に興味を持つ、もしかしたら部落の人と思われるんじゃないかと、焦って本棚から本を引き抜いて、タンスの奥に押し込んだ記憶があります。危なかったなあと思っていました。

大学生の頃、もう一つエピソードがあって、学生ホールという空間が大学の構内の中にありました。広い扇みたいな空間があり、そこに丸テーブルや椅子が並んでいて、学生が自主学習をしたりとか、ボードゲームができる場所があったんです。そこで知らない学生二人が丸テーブルにパソコンを広げて何か動画を見ていたんです。ユーチューブの動画です。田畑とか公民館があったりして、どこかの日本の地方の景色を映していた動画です。その動画のタイトルに部落という言葉が書いてあって、ここが部落ですみたいな。ここが被差別部落と呼ばれる場所ですみたいな、ちょっと部落を面白がって紹介するような動画だったと思います。その動画を二人の学生が見ているのを見た時に、自分の家に帰って、自分のパソコンを見て自分の住所を打ち込むわけです。自分の地元は映されてなかったんです。それを見て安心して、ああよかったなあと思った記憶があります。その二人の学生は見ず知らずの学生でしたから、最後まで会話を聞いていないんですけれども、耳にちらっと入ってきた言葉からは、娯楽になっていると思い、びっくりしました。被差別部落というのはどういう場所なのかということを、動画を見て面白がるという一つの娯楽になっている。都市伝説的な感覚で言っているんだろうな、これにもびっくりしました。

その後、西日本新聞社に入社しました。西日本新聞は人権問題に力を入れていた会社です。ですから人権研修がありました。部落問題について学ぶ研修があって、当時の上司が研修が終わった後に、お前たちはいったいどれくらい部落問題について知っていたんだと。今日に至るまでに、勉強していたと思うけど、部落問題をどれだけ勉強してきたのか、知っていたかということを聞いてきた。私はこう答えました。「部落はありませんね。部落を地区と呼ぶということがあります、それ以外にも差別的な意味があったんですね」というふうにとぼけました。当時の上司は呆れた顔をしたのですけれども、それを見て良かったな、危なかったなという記憶があります。たぶん地区学習会を受けて、部落問題については同世代の人よりはある程度詳しいと思います。ですから、自分がへたに知識があったなら、自分がもしかしたら取材をやらされていたかもしれない、それが嫌だったんだと思います。そういうふうに部落から逃げてきたので、新聞記者としても、部落問題はまったくノータッチでした。取材はなかったですし、誰か当事者に話を聞くことはまったくしなかった。

しかし、一つ部落問題の取材するきっかけはありました。私の任地は長崎でしたから、長崎の取材は多かったです。長崎は原爆が投下された都市なんです。ですから、被爆者がいらっしゃいました。被爆者で、自分の体験を語り継いでいる語り部という人たちがいらっしゃって、イメージしやすいのは修学旅行とかで、原爆集会に行ったら被爆者の方が自分の体験を語ってくれる。特に新聞は8月6日が広島、その前後は原爆関係の記事が増えてきます。核兵器の問題に関して、一つのパターンというか、決まって掲載するのは、原爆の体験者インタビューです。その取材を私がするわけです。新聞紙上では8月が多いんですけれども、長崎の地方版では、毎週のように原爆関係の記事を出しています。毎週のように被爆者の体験を聞く時間があって、私にとって取材するのがしんどい時期がありました。原爆の体験についてお話を聞かせてもらうわけです。取材お願いしますと、話を聞かせてもらって、それから私が質問をして、自分の話をしている段階でもう涙を流して泣いている方もいらっしゃるわけです。語り部というのは結構いらっしゃいますけれども、毎週のように、何回も語っている内容なのだけれども、未だに泣きながら話をされるわけです。やっぱりつらい体験されているわけです。ご家族を亡くされているわけです。自分の目の前で原爆によって亡くなった方もいらっしゃいますし、原爆投下直後の長崎の町は地獄のようだったと、みんな口をそろえて言うわけです。町中遺体が転がっていて、それを丁寧に弔う余裕がない。リヤカーで一か所に集めて、そこで火をつけて燃やす。そういう光景を自分の目で見ていらっしゃるわけです、その人たちは。ですので、本当に未だに泣きながら話される、その話を聞いたうえで掘り下げて、やっぱりちゃんと取材しないと伝わるものも伝わらないので、たぶん答えるのにしんどかった質問をするわけです。地獄の中で、その時に見えた景色、どれくらい死体があったのか、足元で何があったのか、こういうことを深堀りするわけです。ご家族に会った気持ちとかは、あえて深く聞かなくてはいけなくて、僕は原爆投下地の長崎にいませんでしたから、自分自身体験していないので。きちんと聞いて書かないと、伝わるものも伝わらないので、ちゃんと取材するわけです。たぶん答えるのはしんどかったろうなと思います。泣いている人を見ようによっては追い打ちをかけているように見えていたと思うんですけど、取材が終わって、記事を書いていると、私の携帯電話に被爆者の方から電話がかかってきて、言われる言葉は決まっていまして、「取材をしてくれてありがとう」なんです。あなたのおかげで伝える事ができました、そういうふうにおっしゃっていて、やりがいを感じる瞬間なんです。

ただ、それがしんどいなと思いました。後ろめたくなるというか。なぜかというと、自分は部落問題について書いてないという負い目があったからです。原爆の話を伝えていくということを通して、被爆者と自分を比べてしまったというか。なぜ被爆者が原爆に

ついて語ってくれるのか、本当に伝えたくなりまして、それは核兵器という社会問題の中で伝えていきたいと思ったんです。なんとなくそういう気持ちは無意識的にしろ意識的にしろ、本当にあったのだと思います。核兵器というのはとんでもない社会問題なわけです。世界で何発もあります、それを数で伝えるよりも、むしろ自分で体験しているから、それを伝えるのが、一番伝わりやすい、社会問題は伝えやすい、新聞は読者がどんどん減りつつありますけども、何十万人くらいには伝えられる余地があって。だから、被爆に関して、特に取材している、だからこそ自分の体験を語ってくれたということだと思っています。一方では私は部落問題については何も書いていない。社会の問題を変えたいという思いがあって新聞記者になったんですけど、やっていることと自分が向き合うという姿勢とが、折り合いがつかないという時期が何年間か続きました。原爆の語り部や原爆関係の、核兵器を無くすような、核廃絶を目標にした運動に対しての誹謗中傷みたいなのがあったりするなど、さまざなリスクがあるわけです。リスクを負っておられるのです。対して、常に書いている自分にはそういうものはない、自分だけ安全圏にいる気持ちもあったんじゃないかと思います。

その中で背中を押してくれた方がいました。被爆者の岡信子さんという方です。どういう方かと言いますと、長崎は毎年8月9日、原爆が投下された日に平和祈念像のある前で慰霊の式典があって、その式典の中で、毎年一人被爆者があいさつをしています。主には核兵器の廃絶を誓うような事を言われるわけです。慰霊の式典は、日本政府の関係者とかが、核兵器廃絶を訴えるような式典です。そこで2021年、私が長崎任地の最後の年に、被爆者の代表に選ばれたのが岡信子さんでした。今年は岡さんが被爆者を代表して平和の思いを語ることになりました。そこで気になって、岡さんの話を聞かせてくださいと言って、後日日程を組んで岡さんの話を聞かせてもらいました。岡さんにどのような被爆体験があったのかというと、当時看護学校に在学中であり、家族が大変な中で、救護所に集められて、被爆者の手当てにあたる。救護所にものすごい数の人が集められていた。しかし、当時医療器具も満足になくて、ほとんど生きたまま出て行かない、そういう状況で、無力感もありましたし、そういう体験をされていて、92歳で元気に話せる感じではないです。言葉をなかなかはっきりと伝えられないです、岡さん自身、私の言葉も、なかなか聞き取れない。4時間ぐらいかけさせてもらい、最後まで話を聞かせていただきました。真夏の平和公園での平和式典というのは、年々気温がすごく上がっていて、話せるかな、急に倒れたりしないかと思っていたんですけれども、最後までご自身の言葉で語られていました。

「私たち被爆者は核兵器の廃絶を訴えていきます」と、やっぱり未だに自分の頭に焼き付いているんですね。その姿を見て、このままでいいんだろうかと思って、記事を書

こうと思いました。被爆者への差別というものがあります。岡さんは被爆されてご結婚され、お子さんができたそうなんですけれども、流産されました。相手の親戚から言われたのは「被爆者の嫁をもらわなければよかった」です。このことがあって、岡さんは原爆について話せなかった。私が会った時は92歳で、その10年くらい前、80代でようやく原爆の話ができるようになった、長い間話せない時期があった。そのことを岡さんと違うかもしれないけれど自分と重ねていたんじゃないかと思います。

2022年は全国水平社100年の節目です。新聞というのは節目の時、記事が書きやすい時期です。ですから西日本新聞の中で現代の部落問題を書いていこうと会社としても流れがあって、そこでまず、一番今の現実に近いというか、現在の部落問題を書かないといけない。僕だったら書けるかなと思って、まず自分の体験を自分とゆかりのある地区学習会で教えてくれた恩師とか同級生というか、一緒に学んだ友だちがいるわけです。今いったい何をしているのかを取材するのがいいんじゃないかと思いました。

最初に幼馴染に声を掛けました。一番声が掛けやすかったですし。隼人君（仮名）という人がいました。どういう人かというと、私より1歳年下で小学校前から付き合いがあって、仲がいいんです。お互い敬語とか使わずに、どちらかというと悪友でした。一緒に地区学習会をさぼったりしていました。先生をからかったりもしていましたし、一方で野球ばかり熱心に取り組んでいたので、一緒に野球やっていて、高校を卒業してお互い疎遠になっていたのですが、電話してみたら最近地元で働いているんだということで、ちょっと一緒に飲もうと地元の居酒屋に呼び出しました。右手の薬指に指輪がはまっていたのです。「結婚したんだ」と言ってくれて、そういうことを楽しく飲んで話をしたのですけれども、隼人君は「部落問題についての取材なんでしょう」と。それで、私は「話を聞かせてもらっていい？」と言って話を聞かせてもらいました。少し前のことです。隼人君が当時好きだった人に告白をしました。隼人君が付き合ってくれとお願いしてOKだと、良かった良かったと思っていた。その時、彼女に「実は私は部落の生まれなんだ。そのことで嫌われないかとおばあちゃんが心配しているんだ」と言われたそうです。隼人君はその時思ったのは、彼女はものすごく覚悟をしてくれたのだろうな、隼人君自身は、自分の出自を親しい人に伝えたことがないです。なぜかというと、そのことで、部落の子は嫌だと思われるのが怖いんです。なんですけど、彼女はものすごい覚悟をしたのだろうなと思って、とにかく、早く安心させないといけない、不安にさせてはいけないと思って、即答したのだと思う。「そんなことは関係ないよ。おれも部落の出身だから、そういうの気にするようなことやめよう」とそういうふうに言ったそうです。それからしばらくして二人は結婚してお子さんも生まれたということでした。

隼人君は、すごく人の気持ちを思いやる人間です。隼人君らしいなと思ったんですけ

れども、隼人君としては、当時のことを振りかえって、「心配なことがあるんだ。自分はああいうふうに言えて良かったと思っている。だけど、もし部落問題を知らなかったら、そんなこと言えたのか」と言いました。隼人君は地区学習会を受けている、部落の出身はこういうことだったんだ、カミングアウトも知っているわけです。なんですけれども地区学習会がなかったら、自分はそんなこと分かっていたのかなと。戸惑ったりしたに違いないわけです。差別をする人ではないですけれども、戸惑ったりしたかもしれない、もしかしたらそのことで相手を心配させていたかもしれない。学んでいなかったら、偏見があった、変な思い込みがあったのかもしれない。そしたら傷付けていたかもしれない。だから今となっては二人でさぼったりはしたけれども、地区学習会を受けてよかったという話をしてくれました。この話を聞いて、隼人君も私自身も、自分の出自を伝えたことはなかったし、彼女はどんな気持ちだったかなと思って。でもさすがに隼人君の妻には話しづらいじゃないですか。誰か自分の話をしてくれないかと思ったんですけれども、意外なことに私の姉が話をしてくれました。

私の姉は、大学生の頃ですけど、交際相手に私は自分の出自を伝えたそうです。「部落は気にする？」と聞いているそうです。姉からそんな話が出るとは思ってなくて、こういう新聞記事にできる話と思わなくてけっこうびっくりしていました。明るくて友だちが多くて、異性からも相当モテる姉です。そういう姉なんですけれども、あまり人権問題、社会問題に関心がないものと思っていました。新聞記者になってからそんな話を二人でしたこともなかったし、社会問題にかかわったことも特になかったですし、あまり自分の出自を気にするような人だとも思ってなかったです。なんですけれど、伝えるようにしているんだとびっくりするような話を聞かせてもらいました。一緒にドライブに行ったんです。「姉ちゃん部落問題考えたことある？」と聞いたら、「実は、私ようしてるで」と。びっくりして車の中で話をさせてもらいました。姉になぜ自分の出自を伝えているのと聞いたら、「やっぱり付き合っている人というのは将来一緒になるかもしれないじゃない、結婚という話が出てきた時に、部落の人と結婚したくない人だったら、そこで終わっちゃうでしょう。いろんなリスクがあるでしょう。だからあらかじめ言う」と。どういうふうなタイミングでどういうふうに伝えるのかというと、姉が言うには交際が始まってしばらくしてから、というわけです。「私部落だけれど気にする？」と、「私料理できないけれども気にする？」と同じように軽い感じで。ですけど、伝えるときの気持ちは「やっぱり、断られたら多分傷つくと思うんだ。だからこわいんだ」と言います。タイミングはなぜ交際が始まってからかというと、姉の恋愛のやり方というか、そういうものらしいのです。交際が始まってすぐは、まだそのタイミングに入り切ってないというわけです。交際が始まってお互い二人の時間を過ごすことによって、少しずつ親しさが増してくる。だ

から交際が始まってしばらくのタイミングは、強がっていられる間なんだと、生まれを気にする人はこちらから願い下げだよと言えるタイミングなんだと。親しくなりすぎたら、ちょっとしんどいと思うと、このタイミングで断られてもしんどいんだけど、まだ強がっていられるタイミングで、「部落のこと大丈夫？」というふうに聞くと教えてくれました。

隼人君と隼人君の妻と姉の話を聞いて、私自身、自分の出自のことを特別考え過ぎなのかなと思うことがありました。ですけど、二人の話を聞いてみると、若い世代共通の悩みなんだということが、ようやく分かりました。今の若い世代にとって部落問題がどういうものかという講演を聞く機会があり、そこで講演者は、今の部落問題はロシアンルーレットみたいなものだと言っていました。どういうことかというと、部落差別は間違いなく減っている、なくなっているのではなくて、今までいろんな人の努力があったのです。運動の努力もあっただろうし、教育現場の努力もあっただろうし、行政の努力もあっただろうし、メディアもそれに加わっていればいいのかと思うんですが、いろんな人の努力があって、部落問題というのは昔と比べたら間違いなく減ってきている。昔の人の話を聞いてみて、日常的に差別的な言葉が飛び交うという状況はさすがに今はないと思うんです。なんですけれども、なんとなくいろんな節目とか、ふとしたタイミングで部落差別が出てくるわけです。その時にやっぱり部落問題に直面してしまった人たちというのは、昔と変わらないんだと、誰が部落問題に関わってしまうか分からないという話をしてくれました。

次に結婚差別の話をしていきたいと思います。孝さん（仮名）という方を取材しました。どういう方かというと、冒頭で少し話した人です。自分が差別を受けてきた実体験を初めて私に語ってくれた地域のおじさんの話です。孝さん、昔聞いた話で自分の中で結構思い出があったので、あらためてその話を聞いてみたいと思ったのと、なぜ話をしてくれたのかを聞いてみたかったのです。地元に帰って誰か紹介してくれないかなと探してみたんですけれども、解放同盟の地元の支部から、今も活動されているようで簡単に見つけることができて、「昔、話を聞かせてもらったんです。あらためて聞かせてください」とお願いしたら、取材を受けてくださって、どんな話なのかあらためてしようということになりました。

孝さんにとって結婚差別はどういったものだったのかというと、孝さんが20代の時に結婚を決めたんですね。相手は被差別部落の人ではなく、関西の人と言っていました。お互い納得したうえで結婚を決めているわけです。相手にはもともと部落問題の知識がまったくなくて、「大丈夫か」と聞いたら、「正直よく分からない。だけど気にすることではないからいいですよ」と言われたのですが、孝さんとしては、お互い知らないで結婚して、こんなはずではなかったとなるのはよくないと思ったので、あらかじめ勉強して

もらったそうです。結婚相手の方に青年部に通ってもらって、そこで活動もしてもらいながら、部落問題について学んでもらって、一年くらい行っていました。相手も分かるようになってきて、「部落差別は本当におかしい。未だに起こっているんだ。なくさない」といけないと言ってくれたそうで、その時にはこの人を本当にいい人だなと思って結婚を決めたということでした。ですが、相手の親戚は反対をしたそうです。この人と結婚するんだったら、「結婚式に自分たち参加しないよ」と言って、反対をしたと。孝さんはお互いの当事者には祝福してもらいたいわけです。二人のことなので、頭を下げに行きました。相手の親戚の中で一番発言力がある人、この人さえ説得できれば、みんな参列してくれるという意図があったそうで、その人に頭を下げに行って、「許してくださらないでしょうか」とお願いをしたら、「部落の血が混じる、穢れる」と言われた。やっぱりあらためてひどい言葉だなと思いました。結局結婚式の時には相手側の方はほとんど参列されなくて、孝さんの親戚と相手側はお母さんとご兄弟しか来てくれなかったと言っていました。お互い親戚の付き合いはなかった。この話は40年以上の前の話です。孝さんに「今はどうなんですか、今となっては仲良くなっているんじゃないですか」と聞いたら、「未だに親戚付き合いがないんだ。全然過去の話でもなんでもないんだ」ということでした。

孝さんに聞いてみたかったのは、こんな話をなぜしてくれたのか。けっこう幼い私としては反発するきっかけにもなりましたし、部落問題、部落差別の実態というのは、やっぱり反発するきっかけにもなった。何で話をしてくれたのでしょうか、孝さんに聞こうと思っていて、予め質問として用意した。「何でこんな話をしてくれたのでしょうか」聞くまでもなかったです。しなかったです結局。「孝さんなんかこの話の最後に故郷に誇りを持ちなさい的な締めで終わらなかったですかね」。私の質問に答えて体験を語っている孝さんは、最後のオチというのが見えてくる、実は孝さんは「ええこと覚えてくれているな」と嬉しそうな顔をするわけです。孝さんが伝えたかったのは、郷土愛なんです。孝さんは結婚差別の話以外にも、いろんな話をしてくれました。孝さんの関わってきた地域づくりのいろんな話をしてくれた。部落差別を20代で知ったと話していました。なんとなく足を運んだ地域の隣保館で、部落差別の話を教えてもらって、そうかと。いろんなことに合点がいかなかった、昔から疑問に思っていた、孝さんの住んでいるところは住環境がよくなかったそうです。よく言われる話なんですけれども、家がすごく密集していて、台風が来たらすぐに自分の家に帰る、公共施設がなくて、何でそういうふうになっているのがずっと疑問だったと。部落差別を教えてもらって、自分たちの故郷をよくしようと思っていろいろな活動をされてきました。孝さんにとって印象深かったのは地域で祭りを始めることでした。孝さんの住んでいる地区には祭りはなかった。だけど

祭りは楽しそうなものなので、隣の村の祭りに参加したいのですが、部落の者が来ると祭りが穢れると言われて参加させてもらえなかった経緯があるそうです。だから自分たちで、祭りを始めてしまおうということで、地域で祭りの準備をスタートさせます。仕事終わりに村の若い人が集まって、そこでベニヤ板を張り合わせるわけです。手作りの神輿でした。神輿を作って、ダンスとかカラオケとかいろんな催しを企画して、地域で初めての祭りをスタートさせました。当時は張りぼての神輿であったと孝さんは言っていましたが、それを担いで村中練り歩いて、地域のご高齢の方が「生まれて初めてだ、こんな楽しいことは」と。そういうふうに涙を流してくれたのだと、孝さんは今でもそれが目に焼き付いていて、活動の原動力になったと言っていました。「なぜ孝さんはそんなに頑張れたのですか」と私が聞きました、素朴な疑問として。「祭りをするというのは、お金がもらえる活動とかではないので、仕事が終わったあとでやっぱりしんどいじゃないですか、早く休みたいなと思いますし、たまに遊びたいなと思いますし。なぜ、そんなときに活動できたのですか」と聞いたら、「自分の故郷が好きだからに決まっているだろう」孝さんは当たり前のように言うわけです。いい言葉だと思うんですね。すごくいい顔をされていて、にこにこして。割とその時は明るい表情を見る機会が多かったんです。

当時私は朝倉市にいました。地方の田園地帯なんです。当時私が働いていた新聞社の支局は記者が一人だけの支局で、事務所兼自宅で1階に住居スペースがあって、2階に仕事スペースがある中で、住民の方が尋ねに来るんです。何をしにかというと、ニュースの売り込みにくるわけです。こんな行事あるのでぜひ取材に来てくださらないでしょうかとか、こういうおもしろい人が地元にいるんですがぜひ取材にきてくださらないでしょうかというふうにお願いに来て、楽しそうに話してくれるわけです。多分それが郷土愛というもので、誰しもが持っているものだと思います。自分の地元が好きだからこそ、新聞を通してもっとたくさんの人に来てもらいたい。好きだからこそそんな活動をする、それを知ってほしいという思いで話してくれた。孝さんと同じことをされているんだろなと思って、大事に持っているもの、無条件で持っているもの、だけどそれを奪ってしまうのが部落差別でもあるんだということでした。

結婚差別の話をもう一つします。秀子さん（仮名）という方を取材しました。どういう方かと言うと、地区学習会の指導に来ている、孝さんと同じ地域の先輩の方です。部落差別の話と関わるのは地域の先輩、孝さん、学校の先生。学校の先生というのは、多くは被差別部落出身ではないけれど、伝えないといけない。だからどうするのかというと、はじめは知識が薄い状態ですから、地域に入って差別の話を聞いて、部落差別を学んで、私たちに教えていました。先生に部落差別の話をしてくれたのが秀子さんでした。地区学習会で事務的な事をよくやってくれたのですけれども、先生を通じて、

差別、部落差別を教えてくれた人です。私が一番反発していたわけですし、取材を断られるかと思っていたのですけれども受けてくださいました。当時の地区学習会の集会所で待ち合わせをして、秀子さんに会って、部屋に入るや否や、秀子さんが自分の体験を語り始めたわけです。秀子さんが小学生の時の話なんですけれども、お兄さんが結婚したんです。相手は部落とは違う、結婚後知られてしまった。知られてしまって、家族が騒然となったということです。えらいことになったなという話になって、相手の態度が豹変してしまい、すぐに地元に帰ってしまったと。秀子さん家族は何回も家族会議を開いてどうしようどうしようとなって、事情をよく聴いて来いと、秀子さんが一番相手の親戚にかわいがられたそうで、小学生なんですけれども、長距離バスに乗って、事情を聞いてきました。相手の親戚に「なぜこんなことをするんですか」と聞いた。すると「部落を隠して結婚するのは詐欺みたいものだ」と言われた。それからしばらくして、結局関係が改善されることなく、お兄さんは離婚することになってしまったと言ってくれました。

孝さん、秀子さんの兄さんの結婚差別の話をしたんですけれども、それぞれあらかじめ伝えていたか、隠して結婚したかというと、私たちは未だに自分の出自を明かすかどうかを悩むんです。やっぱり二人の話を聞いていると、結婚する時に、相手にこだわりがあった場合は、なかなかどうこうできる話でないだろうと思います。どれだけ結婚差別の根が深いというか、説得するでしょうけれど、ひっかかりが残るものでしょうし、なかなかどうこうできるものではない。ですから節目節目で伝えるべきかどうかについて、答えがないわけです。どちらにしてもリスクがあって、隠して結婚しても、あらかじめ伝えていてもリスクがあって、なくなることはないんだ。だから常に部落問題と結局向き合わないといけない、ということです。

母方の祖母にもいろいろ話を聞きました。どういうばあさんかというと皆さんのおじいさん、おばあさんとなんら変わりがない。同居はしなかったですけれども、孫をものすごくかわいがるわけです。盆とか正月に家に行くとごちそうを食べさせてもらったり、遊園地とかで遊んだり、たくさんいい思い出があります。しかし部落問題を話すことがなかったし、祖母に昔どんな思い出があるのかと聞かせてもらいました。祖母は昔、自分の家の住所が言えなかったそうです。世間話の中で、「どこから来ましたか」と聞かれたら、「市内です」としか答えなかった。祖母が住んでいるところは被差別部落なわけですから、そこの地名を言うと部落の人かと思われるので市内と答えていた。会社勤めをしていて、職場に向かうため、通勤バスを利用していて、最寄りのバス停があり、そこは部落だったわけです。乗客から部落の人と分かってしまうので、一つ前のバス停で上司が乗るから、上司とかち合わないように、バスの時間を一本ずらして、ぎりぎりの時間に出勤していたと。時には乗るバス停そのものをずらす、この話を聞いて、どこか

で聞いたことがあるな、多分地区学習会でこういう差別体験を聞いていたんです。部落差別の当事者の話として、自分の住所が言えないということであったり、乗るバス停とか駅をずらすとかよく聞く話でした。そういう話が祖母の口から出て、あらためて、部落問題との関わりを深く思いました。

祖母にもう少し聞いてみたかったのは、家族の話でした。家族がどういうふうにして成り立っていたのかという話でした。私の親戚はみんな被差別部落出身者ばかりなんです。何でそうなのかずっと疑問でした。というのも、父親と母親がいて僕が生まれて、家族が成り立っていくじゃないですか。父親と母親とでは生まれた場所が違うはずなんですけど、同じ被差別部落でもありますし、ある程度距離の離れていた被差別部落だったりするわけです。場所は違えど同じ被差別部落同士、なぜそうなっているのか、ずっと疑問でした。祖母に聞いてみたんです。祖母が言うには「そういうふうにして結婚すれば一番トラブルが少ないからなんだ。だから、そういうふうに結婚していくんだ」と言いました。昔はお見合いの結婚が主流ですので、あらかじめ被差別部落の中の人に、誰かうちの長男だったり長女だったりにいい人がいらっしゃらないのかというふうに紹介をお願いするそうなんです。相手は被差別部落の人ですから、被差別部落の中で紹介してくれる、そういうふうにして結婚したら、トラブルが比較的おきないわけです。相手が被差別部落だから、結婚したくないということにはならない、同じ被差別部落同士ですから。孝さん、秀子さんみたいなトラブルというのはおそらくおきない。だからそういう人と結婚するんだと。トラブルが少ない方がいいんだと言っていました。

ほかにも思い当たることがあって、私のおじさん、祖母にとって長男。あの時は大変だと祖母が言っていて、まず、被差別部落ということをどのタイミングで言うか、そもそも言うべきなのか、もし相手がこだわったらどうしよう、相手が良くても親戚がというようなことがあるんじゃないか、家族会議しながらさまざまなシュミレーションして、どういうふうにするのか話し合うわけです。答えがあるわけがないんです。いざ両家が顔を合わすタイミングで、「うちは部落です。大丈夫ですか」「関係ないです」と言われて、ようやく落ち着く。これだけ家族で、いろんなことを考え会議をして気をもまなければならない。だから部落同士で結婚するんだというふうに言っていました。

部落差別の話を取材しようと思って、地元に帰って、出てきた話は、ほとんど結婚差別の話だったんです。なぜこれだけ多いのか、祖母と話し合ってみました。祖母は、結婚することによって、自分らが差別される側になるかもしれないからだと言うわけです。部落差別というのは生まれた場所、住んでいる場所で差別するわけです。私は被差別部落に生まれて、そのことは一生変わらないわけです。しかし、そうじゃない人が差別される場合があって、結婚とか就職とか自分が当事者になってしまうから、普段理解あ

る人の中でも、いざという時にためらってしまった人はいるんだと、そういう話になってしまうと言ってくれて、そうかと思いました。

その一方で結婚しようと思う相手とは、なかなか巡り合えないことだと思います。生きているうちに巡り合えたらラッキーだと思います。よく言われる話なんですけども結婚差別というのは差別された側だけが被害者じゃないんだと、差別した側も被害者だと。相手が部落の人間であるというのはその人の一つの側面でしかないし、部落で生まれた、また住んでいるというか、それによって相手にとっても、左右されるというのは、お互いにもよくないことだと思います。こういう言葉を言われました。「人間が月に行く時代に、生まれた場所は関係ない」孝さんの娘さんが結婚された時の話です。相手の方がこういうふうに言ってくれたそうです。すごくいい言葉です。

「穢多御殿」と、私の生まれた家にそういう呼び名がついていたそうです。秀子さんの取材が終わって、バス停に立った時に、「実は西田君の家は穢多御殿と呼ばれていた」と、秀子さんは教えてくれました。びっくりしました。結構重い言葉です、穢多という言葉は。その言葉が自分の家に使われていた話を聞いて、びっくりしました。もともと穢多という言葉を教えてくれたのは秀子さんでした。地区学習会の中で、この言葉は使わないです、使っちゃダメなんだ。だけどみんな知らないといけないから、今教えますと、秀子さんは前置きをして、なかなか言葉が出なかった、深呼吸をして。「えた」という言葉がある。穢れが多いと書く。その言葉で亡くなっている人もいると教えてくれて。亡くなっている人もいるというすごく重い、子どもながらにびっくりした言葉で、秀子さん自身がそういう言葉を使われたことにも驚きましたし、そういう言葉が自分の生まれた家に付いていることにびっくりしました。穢多御殿と呼ばれているのが分かった時の、なかなか言葉にできない心境、話は分かったと思っても、何か眠れない。頭の中で考え過ぎてしまう、そういう心境ってどういうものか、何とか文字にしようとしましたが、なかなかうまくまとまらなくて、複雑な心境というものがあると昔から思っていました。不思議なことを言った人がいます。原爆の被爆者の言葉で、「内臓を押しつぶされたような気持ちになった」と。実際に押しつぶされたわけはないのですが、そういうふうに感じていたと。言葉に表現するのが難しいことがあるんじゃないかと、当事者しか分からないことがあるんじゃないかと思っていて、穢多御殿がそんな心境だったと思います。「生まれたところを間違っていたと思ってしまった」というような表現をしました。生家が穢多御殿と呼ばれていたのは1980年代のことで、私が生まれたのが93年でした。生まれる前だから、そんな気持ちになったんじゃないかと思ってしまう。そうじゃないんですけども、そう思うほど差別の残酷さがあるんじゃないかと思います。

最後の話として母の話をします。母を取材しました。写真がないです母は。カメラを

向けられなかった。写真を撮らせてくれと言うことができなかった。母の取材はちょっとしんどい時間でした。母に取材する前の経緯から話していきますと、2021年夏に部落問題を取材し記事を書こうかなと思い立ちました。岡さんと出会いまして、母にまず伝えました。「部落問題の取材をしようと思っている」、母に一応伝えておくわけです。「あんたがそういうところの出身だからやらされているんじゃないだろうな」、ちょっと強い言葉で母が言いまして、それからしばらくして、この前よりちょっと詳しく話しました。すると強く問い詰めてきました。何かやっぱり、私が部落問題に関わるのに前向きでないのかなと思いました。

取材のために1週間くらい実家に帰りました。1週間くらいさっきまで話してきたような内容を取材しました。初日に隼人君の話を聞きに、2日目に姉の話を聞いたりして、母の取材は最終の7日目でした。母が夜のご飯食べている時に、「あんた何の話よ」と言われて、「地区学習会の話を聞きに来た」と言ったら、母の顔が真っ赤になるんです。何か怒っているんです。怒ってないと母は言いますけど、怒っているわけです。「地区学習会、あんなもの私は嫌だったんだ。あんなの本当にひどいわ、立場宣言なんか」、言葉を出して怒り出しているんです。私はなだめるんです。「今取材で、話聞きたかったんだ。ナチュラルな話で。でも、母さんその話はもういい、話さなくていい、お願いしたけどいいよ」と言ったら、怒りがようやく収まって、翌日会ってみたら普通どおりの母親に戻っていた。不思議な体験だったと思って、何でだったんだろう。なんで母が怒っていたんだろう。そんなやりとりがありました。

今までお話してきたこと等を記事としてもまとめていたんですよね。記事を出す直前になって、母とのやり取りも、新聞記事としても原稿としてもある程度完成していた、会社の中でも合意が取れていて、紙面もある程度確保できている、待っているという状況でいつでもスタートできるかなという時です。母にも思いがあると、後々しこりを残さないようにしていかないといけない、家族ですから記事を出した後も関係は続きますから。だから、部落問題について話をしようと母に電話をしました。いいよとなって、母と話し合う場を持ってもらい、もともと記事にする目的で話を聞きに行きましたから、話が終わったあとに、「記事に書いていい？」、「いいよ」、そういうお願いをして、実家に帰って、母の家に行って、母と夕飯を食べて、夕飯を食べた後に、「母さんひとつ話をしようか」と、話し合いを始めました。まず、どうしんどかったかというと、テレビが目の前にあって、ソファーに横並びで、私と母が腰掛けて、話し合いをスタートするのですが、隣に座っている母と、まず目が合わない。横を向いたら母と目が合うはずなんですけれども、目が一切合わない。母はずっとNHKのテレビを見ていて、あまり母の興味をそそらなかった番組なんですけど、ずっと見ていた。目が合わない、私が質問します。一言

二言しか母が答えません。話が広がらないんですね。記者としてはやりづらい、話が広がらなくて、なんかいつもと違うなというか、そもそも私は母から甘やかしてもらって、母が目を合わしてくれないとか、それまでになかった。たぶん嫌な時間でした。母の部落問題との出会いは私と同じで、地区学習会でした。私が小さい頃とほぼ同じでした。「地区学習会に通っていた」と母が言って、「あ、そう、ぼくと同じなんだね。どうだった」「なんかめんどくさかった」母は言いました。なんとなく気持ちは分かる、子どもなんで、小学生なんで、周りの友だちはみんな遊んでいる。放課後に行くから、なんで自分たちだけと、やっぱり分かるなと思いました。大事な事とは思いつつも、子どもがなんでそんなことと思って仕方ないと思いました。

母と同じ体験があって、あれはどうだった。これはどうだったと言っていたんですけれども、私は経験していないことがあって、それが「立場宣言」というものでした。これは、小学校6年生という、地区学習会の部落問題の学びが、ある程度一段落した時、一巡して部落問題とはどういうものかわかるようになってきた。そんなときに、学校の授業で、参観日にクラスの友だちを前にして、「私たちは被差別部落に住んでいます。今日授業を見に来てくれる、お父さんお母さんもそうです。皆さんと何も変わりはありません」と、宣言する場面があって、母はこれは明確に嫌だった、やらされた後、さらしものにされているみたい、嫌だったと言いました。立場宣言に関わった当事者として、話を聞かせてもらって、子どもたちは自ら宣言する、というわけです。母がやらされたという、難しい話です。「そういう立場宣言はどうなんですか、だめじゃないんですか」と、聞かれるんですけれども、結構難しいです。母の見方なので、良かったかと聞かれて、いいわけはないでしょう。だけど間違っているんですかと聞かれたら、間違っているとは強く言い切れないというか、しづらいなと思っています。というのも、さきほど祖母の話をしました。祖母は、昔自分の住所が言えなかったという話をしたんです。今は、ばあちゃんは自分の住所は言えるでしょうと、いつから言えるようになったのかというと、母の立場宣言を見て、言えるようになったというわけです。祖母は自分が被差別部落の生まれであることを卑下する気持ちがあって、複雑な気持ちがある、なかなか住所が言えなくて、識字学級を受ける時代なんです祖母は。ミカンの箱を机にして、字の読み書きを習った、今でも語り継がれている識字学級の世代で、そういう時代の祖母が、自分の住所を言えるようになったのは、ものすごいことなんです。母の立場宣言で子どもたちが堂々と宣言していた、卑下していない、ものすごいエネルギーのあった人なんです。だけど母は嫌だったというふうに言って、なかなか良かったとは言わないですから、正しいとは言えないですけれども、かといって必ず間違っていることはないんだろうなと思っています。母は地区学習会に通っていて、中学校、高校では部落問題にかかわることはないかな

と思っていたそうです。皆知らないだろう。ですけど部落問題に対して時間はとれなかったそうです。その時には母はテニスがものすごく好きでした。母はインターハイに出ていました。インターハイに出るような高校生活をなんとなく想像できると思いますけれども、朝練出て、授業を受けて、放課後部活やっていった、学生スポーツ競技者の一日を絵に描いたような生活。なかなか部落問題を学ぶ時間とかに取り組むような時間は取れませんが、いつまでも部落の子として取り扱われると言っていました。

その一方で、私の目から見て、母自身は人権問題に理解がないわけではない。いろんな問題に対して、未だに職場の研修で、関わることもあるようですし。いろんなかたちで、立派な活動する、差別をなくすような活動を行う。だけど私自身、母とのやりとりがしんどくて、私が何を言っても、話が広がらないので、会話が途切れてしまって、しばらくテレビの音が流れている状況でした。この話終わりかなと思ってから20分くらいたって、母はこんなふうに切り出しました。沈黙を破って、「そうはいってもあなたには普通に暮らしてほしいと思っている」と言いました。さみしい気持ちになる言葉です。部落問題に取り組む、応援してもらいたいという気持ちがあったでしょうし、普通という言葉は気を付けて使った方がいい、部落が普通ではないという意図が含まれていると思いますし、母はそれを分かって使っているわけです。出身者であっても、言葉では表現できないものがあった。それはせめてあんたらは部落差別に関わりなく暮らしてほしいという意味合いだと思うんですね。ですが、母の真意はどこにあるのかなと思うわけです。記者としても言葉どおりと違うのかな、母の本当の願いは何だろうと。それはもう簡単です。シンプルに差別のない世になってほしいと思っている、語っている。自分が被差別部落出身者なので、差別がなくなったほうがいいに決まっているわけです。ですけれど、そう簡単になくなるものじゃないというわけです。なかなかなくなるものでもないと思っているんです。そんな中で、「差別のない世の中」、そんな言葉使うのはリスキーであるわけです。母は自分の出自を隠して、会社勤めをしていて、まわりの人は母の出自を知らないわけです。「当事者」、こういうような言葉を使うのは、知られてしまったことにつながるわけです。いろんな就職差別があります。だから、平穏な暮らしを願います。そういうやり取りがありました。その母とのやり取りを踏まえて、母との話はこんなふうにしめくくりました。最後の言葉です。「切実な願いに応えられる新しい時代を、みんなでつくりたい」。みんなという言葉に思いを込めました。

私の書いた連載記事、いろんな人権問題があります。部落問題以外でも、人権問題と言われているものです。性的少数者、障がい、外国人、その他いろんな、すべて人権問題の共通は生きづらさというところです。人権問題というのは、あまり普段日常生活とは関係がないと思いがちですが、決してそうじゃなくて、すぐ近くにあるわけです。生

きづらさを感じている人は、ある時期に気付くんです。カミングアウトを考えたり、そういうきっかけ、機会がない。あったとしても、実は簡単に言えないだけです。母みたいな人間でもそうです。ですから、人権問題は身近なものであることを分かってもらえればと思います。ご家族かもしれないし、友だちかもしれないし、同僚であるかもしれないし、大切な恋人の話かもしれないし、隣の人の話かもしれない。こういう言葉があります。「当事者が立ち上がって社会運動が始まった後は、マジョリティの側が何ができるかを考えないといけない」関西大学の教授の話で、社会の多くの場で生きづらさを感じているのは、マイノリティの社会的少数派。簡単に社会を動かすのは容易ではない、だからこそマジョリティの側が何ができるかを考えないといけないと。社会問題の責任はマジョリティ側にある、だからこそマジョリティ側が変えていかないといけないということです。人権問題もそうです。

長い時間ご清聴いただきありがとうございました。

第２部　人権フォーラム　－私のひとこと－

演　題　つながる・つながっていく ～杉の子学級から～
発表者　志染小学校児童生徒支援教員 / 藤原 美和 さん

志染小学校児童生徒支援教員の藤原美和です。教育事業杉の子学級を担当しています。よろしくお願いいたします。

杉の子学級は、2022年度まで主に小学校の校舎を使って活動してきました。ずいぶん前は、学習内容によっては総合隣保館でも活動していたそうです。2023年度からは、活動場所を公民館及び総合隣保館へと移しました。それは、人権尊重の仲間づくりを進めていくためには、「人とつながる」「地域とつながる」「活動をつなげる」ことが大切と考えたからです。そして、そのつながりを広く長く強くしていくことこそが、何より大切であると考えたからです。本日はつながりを大切にしてきた杉の子学級の、昨年度と今年度の活動を紹介します。

他の学級でも同じですが、杉の子学級の活動内容は「基礎」・「生活」・「人権」の3つに分けられます。「基礎」では、自ら学ぶ、考える力を高めます。「生活」では、仲間と協力する楽しさや大切さを学びます。「人権」では、自分や相手を大切にすること、また、おかしなことを見抜く力をつけること、地域のよさを学ぶことについて、体験を中心にして学習を進めています。では、どんな活動をしているのでしょう。

まず、名人さんシリーズと名付けている活動を紹介します。これは地域の方、保護者の方、隣保館の職員の方々から、名人技を教えていただく活動です。

きらきら書道。隣保館こども教室の友だちと一緒に、書道を楽しみました。足の裏まで真っ黒にしながら、大きな紙に大きな字を書きました。

絵画教室。高学年は名人さんから影の描き方を教えていただき、ぐっと大人っぽい絵に仕上げていました。文化祭で展示しますので、是非ご覧ください。

さつまいも料理。収穫したサツマイモを名人さんと一緒に調理しました。焦がさないように焼くのが大変そうで、そして楽しそうでした。甘くておいしいサツマイモに秋のめぐみを感じました。

フラワーアレンジメント。名人さんに、花の名前やアレンジの仕方を教えていただきました。思い思いに花を活け、「大人の作品とは一味違う、子どもらしいアレンジメントに

仕上がっていますね。」と褒めていただきました。

卓球教室。隣保館の名人さんと卓球をしました。館長さん相手に「200回ラリーをめざす！」と張り切っていました。この活動は交流生体験として行ったもので、たくさんの友だちと一緒に卓球を楽しみました。

名人さんは、志染小学校の職員にもたくさんいます。

お琴をひこう。初めて琴を触る子が多かったですが、公民館が一気に和の雰囲気になりました。

パラスポーツ・ボッチャを楽しもう。狙ったところにボールが転がっていき、ぴたっと止まった時には歓声が上がりました。

イラストを描こう。地域の中に立っている交通安全看板が古くなっているために、オリジナルイラストを描いて付け替えます。思わず見とれてしまって、かえって危ないんじゃないかというくらいに、素敵な交通安全看板に仕上がりました。まだ、看板は立っていませんが、楽しみにしていてください。

興味を広げたり、自分の得意なことを見つけたりするきっかけになればと思い、名人さんシリーズを続けています。名人さんと一緒に活動することは、その人をより深く知る機会にもなります。「こんな自分になりたい」と、なりたい自分の姿を見つけ出し、より自分らしく生きようとする意欲を持つことができるように、これからも人とつながる活動を多く取り入れていきます。まだまだたくさんの名人さんがいらっしゃると思います。名人さん、お待ちしています。

次に地域行事を紹介します。地域行事は中学校杉の子学級と合同で行い、地域の方々や保護者の方々と一緒に活動します。サツマイモの苗植え、サツマイモ掘り、しめ縄作り、とんどです。地域の伝統的な行事を楽しむ機会となっているこれらの行事では、計画や準備などで地域の方々に大変お世話になっています。いつもありがとうございます。子どもたちは、地域の方とつながることによって、地域の方々に支えられていることを知り感謝の気持ちを持つとともに、みんなで一緒に活動していこうという意欲を持つことができると感じています。これからもよろしくお願いします。この他にも中学生との合同行事には、ディキャンプや館外活動があります。みんなで協力しながら、友だちの家の人との交流を楽しんだり、人権について学習したりする機会を持っています。

次に、杉の子座について紹介します。総合隣保館文化祭では杉の子座はこれまでも多くの演目を公演してきました。児童数が減ってきたことによって、演目の選定、登場人物の役割分担など多くの課題があったことが想像できます。それでもその時の担当

が中心となって、工夫を凝らして取り組んできました。

昨年度は初めての試みとして、長年、文化祭で人権劇を上演しておられる劇団テアトロ三木さんとの共演に挑戦しました。「子どもたちと一緒に劇をしていただきたい。」と依頼をしましたら、快く引き受けてくださり、練習方法も工夫してくださいました。杉の子座、テアトロ三木それぞれが別々に練習しているものを動画に撮り、それを見ながら練習を重ねました。合同の練習は2回のみです。はじめは声も動きも小さかった子どもたちですが、劇団員の方に褒めてもらったり、励ましてもらったりしながら、どんどん上手になっていきました。「良い劇を作り上げたい」「人権について共に考え、伝えたい」という同じ思いを持つ人たちと、一緒に練習し劇を上演するという貴重な経験をしました。同じ志を持つ方々とつながることによって、子どもたちは思いが伝わっていく実感を持つことができたことでしょう。これからも自分に自信を持ち、自分を表現することの楽しさを感じていってほしいと願っています。

最後に志染小学校での取組の一部を紹介します。PTA事業の一つに教育事業参観があります。これは毎年4年生とその保護者を対象とした人権学習です。人権について共に考え、人権問題の解消に向けて意欲を高めていくことを目的としています。担当者である私が4年生の児童向けに話す内容や、人権推進課指導主事が保護者向けに説明する内容などについては、杉の子保護者会で話し合い、より充実した参観になるように努めています。

学校では、全校生が一緒に人権学習を行う時間として「友だち集会」を設けています。昨年度は、文化祭で上演した人権劇をみんなで観て、その感想を交流しました。いろいろな学年が混ざったグループなので、低学年の子が劇の内容で分からなかったところを高学年の子に質問していました。高学年の子は、劇の「町の石ひ」の話を授業で学習して知っているので上手に説明していました。また、劇での友だちの頑張りについて話している子もいました。学年で行っている人権の授業とはまた違うあたたかさと心強さを感じる集会になりました。

これまで杉の子学級での活動を中心に話をしてきました。公民館で活動していると、「何をしているのかな」「みんな元気かな」と公民館をのぞいてくださる地域の方がいらっしゃいます。また、公民館に、仕事の用事で来られた時に子どもたちの活動の様子を見て、「ぼくらの頃はもっとたくさん人数がいたけれど、今は少なくなっているんですね。でもみんな元気ですね。懐かしいな。劇もしました」と話をしてくださったのは元学級生の方です。畑で活動していると「頑張って勉強しいよ」と励まして下さった方もい

ます。バス停から公民館への道中に、散歩の方やお仕事中の方、おうちの方々が「おかえり」と言ってくださいます。そんな方々とのつながりも、子どもたちにとって大変嬉しい時間になっています。

私のかつての教え子が、こんなことを私に話してくれました。「みんな『がんばって』と私らに言うけど、私らは杉の子で頑張ってる。何で私らだけが頑張らなあかんの。勉強せなあかんのは他の子らもや。私らだけが頑張るんじゃなくて、みんなが頑張らないとあかんのやろ」この子の言うとおり、他人事ではなく自分自身に関係することとして、みんなで取り組まなければならないのです。人権問題について一人一人が自分事としてとらえ、考え、行動していかなければならないのです。いつもこの子の言葉が私の前にあり、「人を大切にしている？」「正しく判断できている？」「正しく行動できている？」「自分の言葉で伝えられている？」と問いかけてきます。頑張るのは私自身なのだということを、この子に教えてもらいました。

これまでも、たくさんの人から、子どもたちから、多くのことを教えてもらいました。これからももっとたくさんの人とつながって、多くのことを学ばせていただきたいと思います。そして、教えていただいたことや学ばせていただいたことを、杉の子学級から広くつなげていきたいと考えています。そのつながりが長く強くつながっていくことを願い、これからの活動も子どもたちと一緒に楽しんでいきたいと思います。これで私の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

三木市人権尊重のまちづくり条例（抜粋）

すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利について平等であり、個人として尊重され、基本的人権の享有が保障されなければならない。

しかし、現実社会においては同和問題、女性、子供、高齢者、障害者、在日外国人等、人権に関する問題が存在しており、その解決に向けた積極的な取組が強く求められている。

真に一人一人の人権が尊重される明るく住みよい社会をつくるためには、私たち一人一人が、人権に関する問題を共に考え、理解し、その解決のために協力し合うことが何よりも重要であり、そのことが「人権という普遍的文化」の更なる進展につながるものであると思料する。

よって、私たち三木市民は、世界人権宣言及び日本国憲法の理念の下、すべての人の人権が尊重され、明るく住みよいまち、三木市をつくるため、この条例を制定する。

（目的）

第1条　この条例は、あらゆる人権に関する問題の解決への取組を推進し、人権が尊重される明るく住みよい社会の実現を図ることを目的とする。

（市と市民の役割）

第2条　三木市（以下「市」という。）は、市民一人一人の人権が尊重される社会の実現を目指し、効果的な人権教育と人権啓発の推進を図るとともに、人権尊重に関する施策（以下「人権施策」という。）を積極的に推進する。

2　市民は、相互に基本的人権を尊重するとともに、自らが人権尊重のまちづくりの担い手であることを認識し、人権意識の向上に努める。

附　則

（施行期日）

1　この条例は、平成13年1月1日から施行する。

差別を許さない市民宣言

わたしたちは、何よりも「自由と平等」をねがうものであり、日本国憲法も基本的人権を保障することを明らかにしています。しかし、わたしたちの日々の生活の中で、今なお許すことのできない差別が人々を傷つけ、苦しめているのです。

昭和40年の「同和対策審議会答申」や昭和44年制定の「同和対策事業特別措置法」は、同和問題解消へのとるべき筋道を明らかにしました。

わたしたちは、行政と力を合わせ、教育や対策事業をすすめて問題の完全解消に努めてきましたが、ここでさらに同和問題を完全になくするために、おとなもこどもも一人残らず一丸となって、人権を尊重するまち―三木市をめざして、次の事柄を力強くすすめます。

1　同和問題を正しく知るため、すすんで学習します。
2　差別をなくするために、差別を許さない市民の輪をひろげます。

わたしたちは、この宣言のもとに新たな決意をもって、明るく心豊かな「差別を許さない三木市」を築いていきましょう。

（昭和51年1月24日制定）

人権・同和問題啓発資料　しあわせに生きる No.43

令和7年3月　発行
編集・発行　三木市立総合隣保館
〒673－0501
三木市志染町吉田823番地
TEL(0794)82―8388
FAX(0794)82―8658